

二〇 トモスといふ島に在りき。二〇 われ主日に御靈に感じるに、我が後にラツパのごとき大なる聲を聞けり。二一曰く「なんぢの見る所のことを書に録して、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒヤ、ラオデキヤに在る七つの教會に贈れ」二三 われ振りて我に語る聲を見んとし、振りて見れば七つの金の燈臺あり。二三 また燈臺の間に人の子のごとき者ありて、足まで垂るる衣を着、胸に金の帯を束ね、二四 その頭と頭髪とは白き毛のごとく雪のごとく白く、その目は燄のごとく、二五 その足は爐にて焼きたる輝ける眞鍮のごとく、その聲は衆の水の聲のごとし。二六 その右の手に七つの星を持ち、その口より兩刃の利き劍いで、その顔は烈しく照る日のごとし。二七 我これを見しとき其の足下に倒れて死にたる者の如くなれり。彼その右の手を我に按きて言ひたまふ「懼るな、我は最先なり、最後なり、二八 活ける者なり、われ曾て死にたりしが、視よ、世々限りなく生く。また死と陰府との鍵を有てり。二九 されば汝が見しことと、今あることと、後に成らんとする事とを録せ、三〇 即ち汝が見しところの我が右の手にある七つの星と七つの金の燈臺との奥義なり。七つの星は七つの教會の使にして、七つの燈臺は七つの教會なり。

第二章

一 エペソに在る教會の使に書きおくれ。
 「右の手に七つの星を持つ者、七つの金の燈臺の間に歩むもの斯く言ふ、二 われ汝の行爲と勞

イ徒二〇・七 一六・一四を見よ
 口黙四・二、一七・三、 子黙三・一、四 一六・一四、一四 結一
 二二・一〇 太二二 二六 但七・二三、
 ・四三 又黙三・一四 西二・一 一〇・二六
 八黙四・一 魯一・四、二〇 三但一〇・五
 二九を見よ 又黙三・一四 西二・一 三但一〇・五
 一九を見よ 一六・一四、二〇、二二 一〇・二六
 水黙二・八 (出三五・三七、三 二二 但一〇・六
 へ黙二・二二 七・二三 亞四・二) (但七・九)
 ト黙二・二八、二四 徒 七 黙二・一 結一・七
 ヲ黙二・一 結一・七 黙一〇・一 (太一七 三 察四一・四、四 太一六・一九
 四・六、四八・二二 工黙一・二二 一六
 ヤ路二四・五 (黙四 九、一〇)
 マ黙二・八 羅六・九 二五を見よ
 フ黙一〇・六、一五・七 (太五・一四、一五)
 フ黙六・八 及び太一 一・二三を見よ
 キ黙一・二一を見よ
 ユ黙一・二六を見よ
 メ黙一・二二、一三を 見よ
 ミ黙二・一九、三・一、 八、一五

フ徒一五・二八 (歌三・二二、二〇、
 四) ミ歌二・七を見よ
 コ歌三・二一 (四) シ歌一・一一を見よ
 エ約二一・二二を見よ 半歌二・五、一九、
 二歌一・四を見よ
 ア太一〇・二二を見よ 二歌三・〇・一四 耶一
 三・一〇を見よ
 來三・六 九・二一 二を見よ
 サ歌二・五 詩二・八 メ歌二・二・一六 セ提前五・六を見よ
 ス歌二・五 イ歌二・五を見よ
 口歌一六・一五 撒前
 五・二 及び 彼後
 三・一〇を見よ
 ハ(歌二・五) 二太二四・四三を見よ
 ホ歌一・一一を見よ
 へ(約二・三) ト歌三・五、一八、四、
 四、六、一一、七、
 九、一三、一四 (歌
 一九・八、一四 傳九
 八)
 チ歌二・七を見よ
 リ歌一三・八、一七、
 八、二〇・二二、一
 五、二二・二七
 (路一〇・二〇) カ賽三・二二(太一
 又太一〇・三二を見よ
 六・一九 歌一・一
 ル歌二・七を見よ 八)

三六 いふ、我ほかの重を汝らに負はせし。三五 ただ汝等はその有つところを我が到らん時まで保て。三六 勝を得て終に至
 三七 るまで我が命ぜしことを守る者には、諸國の民を治むる權威を與へん。三七 彼は鐵の杖をもて之を治め、土の器を
 三六 碎くが如くならん、我が父より我が受けたる權威のごとし。三六 我また彼に曙の明星を與へん。三九 耳ある者は
 御靈の諸教會に言ひ給ふことを聽くべし」

第三章

一 サルデスに在る教會の使に書きおくれ。

「神の七つの靈と七つの星とを持つ者かく言ふ、われ汝の行爲を知る、汝は生くる名あれど死
 二 にたる者なり。ニ なんぢ目を覺し、殆んど死なんとする殘のものを堅うせよ、我なんぢの行爲のわが神の前に全
 三 からぬを見とめたり。三 然れば汝の如何に受けしか、如何に聽きしかを思ひいで、之を守りて悔改めよ、もし目
 四 を覺さずば盜人のごとく我きたらん、汝わが何れの時きたるか知らざるべし。四 然れどサルデスにて衣を汚さ
 五 ぬもの數名あり、彼らは白き衣を著て我とともに歩まん、斯くするに相應しき者なればなり。五 勝を得る者は斯
 のごとく白き衣を著せられん、我その名を生命の書より消し落さず、我が父のまへと御使の前にてその名を言
 六 ひあらはさん。六 耳ある者は御靈の諸教會に言ひ給ふことを聽くべし」
 七 ヒラデルヒヤにある教會の使に書きおくれ。
 八 「聖なるもの眞なる者、ダビデの鍵を持ちて、開けば閉づる者なく、閉づれば開く者なき者かく言ふ、ハわ

九 言を守り、我が名を否まざりき。九 視よ、我サタンの會、すなはち自らユダヤ人と稱へてユダヤ人にあらず、ただ虚偽をいふ者の中より、或者をして汝の足下に來り拜せしめ、わが汝を愛せしことを知らしめん。一〇 汝わが忍耐の言を守りし故に、我なんぢを守りて、地に住む者どもを試むるために全世界に來らんとする試練のときに免れしめん。二 われ速かに來らん、汝の有つものを守りて、汝の冠冕を人に奪はれざれ。三 われ勝を得る者を我が神の聖所の柱とせん、彼は再び外に出でざるべし、又かれの上に、わが神の名および我が神の都、すなはち天より我が神より降る新しきエルサレムの名と、我が新しき名とを書き記さん。三 耳ある者は御靈の諸教會に言ひ給ふことを聽くべし」

一四 ラオデキヤに在る教會の使に書きおくれ。
 一五 「アアメンたる者、忠實なる眞なる證人、神の造り給ふものの本源たる者かく言ふ、一五 われ汝の行爲を知る、なんぢは冷かにもあらず熱きにもあらず、我は寧ろ汝が冷かならんか、熱からんかを願ふ。一六 かく熱きにもあらず、冷かにもあらず、ただ微温が故に、我なんぢを我が口より吐出さん。一七 なんぢ、我は富めり、豊なり、乏しき所なしと言ひて、己が惱める者・憐むべき者・貧しき者・盲目なる者・裸なる者たるを知らざれば、一八 我なんぢに勸む、なんぢ我より火にて煉りたる金を買ひて富め、白き衣を買ひて身に纏ひ、なんぢの裸體の恥を露

イ 黙三・一を見よ
 口 徒一四・二七を見よ
 ハ 黙二・一三
 ニ 黙二・九
 ホ 賽四五・一四、四九
 へ 賽四三・四(約一七) 又 黙六・一〇、八・一
 ト 黙一・九
 チ 黙三・八(約一七)
 六
 リ 後二・九 提後二
 ル 黙二・一〇
 ヲ 黙一六・一四 太二
 四・一四を見よ
 三、二二・一〇、一
 三、二二・一四、
 一四・六、一七・二、
 八
 カ 黙二・二五
 ヨ 黙二・一〇
 タ 黙三・五
 レ 王上七・二一(耶一
 二八) 加二・九
 ラ 黙三・六
 ヲ 黙二・二七を見よ
 ヲ 黙一・二一を見よ
 ツ 黙二・二、一〇 加
 四・二六を見よ(來
 非 黙一・五を見よ
 ノ 黙八・二二 黙二一
 六、二二・一三 約
 一・三 西一・一八
 (創四九・三 申三・
 マ 彼前一・七を見よ
 一七)
 才 黙三・八
 ク(羅一・二・一一)
 ヤ 何二・八 亞一
 コ 黙一六・二五
 ケ 賽五五・一(太一三
 四四)
 フ 黙三・四を見よ
 コ 黙一六・二五

九 し、今在し、後來りたまふ主たる全能の神」九この活物ら御座に坐し、世世限りなく活きたまふ者に榮光と尊崇
 一〇 とを歸し、感謝する時、一〇二十四人の長老、御座に坐したまふ者のまへに伏し、世々限りなく活きたまふ者を拜
 二 し、おのれの冠冕を御座のまへに投出して言ふ、二「我らの主なる神よ、榮光と尊崇と能力とを受け給ふは宜なり。
 汝は萬物を造りたまひ、萬物は御意によりて存し、かつ造られたり」

第五章

一 我また御座に坐し給ふ者の右の手に、卷物のあるを見たり。その裏表に文字あり、七つの印をも
 二 て封ぜらる。ニまた大聲に「卷物を開きてその封印を解くに相應しき者は誰ぞ」と呼はる強き御使
 三 を見たり。三然るに天にも地にも、地の下にも、卷物を開きて之を見得る者なかりき。四卷物を開き、これを見
 四 るに相應しき者の見えざりしに因りて、我いたく泣きぬたりしに、五長老の一人われに言ふ「泣くな、視よ、ユダ
 五 の族の獅子・ダビデの萌蘖、すでに勝を得て卷物とその七つの封印とを開き得るなり。六我また御座および四つの
 六 活物と長老たちとの間に、屠られたるが如き羔羊の立てるを見たり、之に七つの角と七つの目とあり、この目は
 七 全世界に遣されたる神の七つの靈なり。七かれ來りて御座に坐したまふ者の右の手より卷物を受けたり。八卷物
 八 を受けたるとき、四つの活物および二十四人の長老、おのおの立琴と香の満ちたる金の鉢とをもちて、羔羊の前
 九 に平伏せり、此の香は聖徒の祈禱なり。九斯て新しき歌を謳ひて言ふ「なんぢは卷物を受け、その封印を解くに
 一〇 相應しきなり、汝は屠られ、その血をもて諸種の族・國語・民・國の中より人々を神のために買ひ、一〇之を我ら

- イ 黙一・八を見よ
- ロ 黙四・二、五・一、七・二五、二〇・一
- ハ 黙四・一〇、一〇・一
- ニ 黙一・八を見よ
- 三 黙五・八、一四、七
- 四 黙五・七、一三、四
- 五 黙一〇・一、一八
- 六 黙五・二、六・一
- 七 黙五・八、一一、一
- 八 黙一四・二、一五
- 九 黙一四・三、詩四〇
- 一〇 黙一四・二、一五
- 一 黙一四・三、詩四〇
- 二 黙一四・二、一五
- 三 黙一四・三、詩四〇
- 四 黙一四・二、一五
- 五 黙一四・三、詩四〇
- 六 黙一四・二、一五
- 七 黙一四・三、詩四〇
- 八 黙一四・二、一五
- 九 黙一四・三、詩四〇
- 一〇 黙一四・二、一五

エ 黙七・九、一・九、
 一三・七、一四・六、
 一七・一五、但三、
 四、五・二九（黙
 一〇・一一）
 テ 黙一四・三、四、哥前
 六・二〇を見よ
 ア 黙一・六を見よ
 サ 黙二〇・四を見よ
 （黙三・二二）
 キ 黙四・四を見よ
 エ 但七・一〇、來二二
 ・三二、猶一四
 （黙九・一六）
 メ 黙五・六を見よ
 ミ 黙四・一一（黙一・
 六、五・九）
 シ 黙二・一〇（黙五・
 三）
 エ 黙五・一を見よ
 ヒ 黙一・六、羅一一・三
 イ 黙五・五
 ロ 黙六・六を見よ
 ハ 黙一四・二、一九、
 六
 ト 黙四・七
 ニ 黙一九・二一、一
 ・八、六・三
 ホ 黙一四・二四、亞六
 ・二一（黙九・七、
 ル 黙六・二
 一九・一一）
 ヘ 黙三・二一を見よ
 ト 黙四・七
 チ 黙一・八、六・二
 リ（太一〇・三四）
 ヲ 黙四・六、七を見よ
 カ 黙七・三、九・四

の神のために國民となし、祭司となし給へばなり。彼らは地の上に王となるべし』

二 我また見しに、御座と活物と長老たちとの周圍にをる多くの御使の聲を聞けり。その數千々萬々にして、

三 大聲にいふ『屠られ給ひし羔羊こそ、能力と富と智慧と勢威と尊崇と榮光と讚美とを受くるに相應しけれ』

四 我また天に、地に、地の下に、海にある萬の造られたる物、また凡てその中にある物の云へるを聞けり。曰く

『願くは御座に坐し給ふものと羔羊とに、讚美と尊崇と榮光と權力と世々限りなくあらん事を』四つの活物

はアアメンと言ひ、長老たちは平伏して拜せり。

第六章

一 羔羊その七つの封印の一つを解き給ひし時、われ見しに、四つの活物の一つが雷霆のごとき聲して『來れ』と言ふを聞けり。ニまた見しに、視よ、白き馬あり、之に乗るもの弓を持ち、かつ冠冕

を與へられ、勝ちて復勝たんとて出でゆけり。

二 第二の封印を解き給ひたれば、第二の活物の『來れ』と言ふを聞けり。四 斯て赤き馬いで來り、これに乗るもの、地より平和を奪ひ取ることと、人をして互に殺さしむる事とを許され、また大なる劍を與へられたり。

三 第三の封印を解き給ひたれば、第三の活物の『來れ』と言ふを聞けり。われ見しに、視よ、黒き馬あり、

之に乗るもの手に權衡を持てり。六 斯て、われ四つの活物の間より出づるとき聲を聞けり。曰く『小麥五合は

一デナリ、大麥一升五合は一デナリなり、油と葡萄酒とを害ふな』

七 第四の封印を解き給ひたれば、第四の活物の「來れ」と言ふを聞けり。ハわれ見しに、視よ、青ざめたる馬あり、之に乗る者の名を死といひ、陰府これに隨ふ、かれらは地の四分の一を支配し、劍と饑饉と死と地の獸とをもて、人を殺すことを許されたり。

九 第五の封印を解き給ひたれば、曾つて神の言のため、又その立てし證のために殺されし者の靈魂の祭壇の下に在るを見たり。一〇 彼ら大聲に呼はりて言ふ「聖にして眞なる主よ、何時まで審かずして地に住む者に我らの血の復讐をなし給はぬか」一二 爰におのおの白き衣を與へられ、かつ己等のごとく殺されんとする同じ僕たる者と兄弟との數の滿つるまで、なほ暫く安んじて待つべきを言聞けられたり。

一三 第六の封印を解き給ひし時、われ見しに、大なる地震ありて、日は荒き毛布のごとく黒く、月は全面血の如くなり、一四 天の星は無花果の樹の大風に搖られて生後の果の落つることく地におち、一五 天は巻物を捲くことく去りゆき、山と島とは悉とくその處を移されたり。一六 地の王たち・大臣・將校・富める者・強き者・奴隸・自主の人みな洞と山の巖間とに匿れ、一七 山と巖とに對ひて言ふ「請ふ我らの上に墜ちて、御座に坐したまふ者の御顔より、羔羊の怒より、我らを隠せ。一七 是は御怒の大なる日既に來ればなり。誰か立つことを得ん」

第七章

一 この後、われ四人の御使の地の四隅に立つを見たり、彼らは地の四方の風を引止めて、地にも海にも諸種の樹にも風を吹かせざりき。ニ また他の一人の御使の、いける神の印を持ちて日の出づる

- イ 黙四・七
- ロ 黙六・三
- ハ 黙一・一八、二〇
- ニ 耶一五・二三、二四・一〇、二九・一
- 三 一・一八、結五・一
- 四 三・一七、一四・二
- 五 一・一八、結五・一
- 六 一・一八、結五・一
- 七 一・一八、結五・一
- 八 一・一八、結五・一
- 九 一・一八、結五・一
- 一〇 一・一八、結五・一
- 一一 一・一八、結五・一
- 一二 一・一八、結五・一
- 一三 一・一八、結五・一
- 一四 一・一八、結五・一
- 一五 一・一八、結五・一
- 一六 一・一八、結五・一
- 一七 一・一八、結五・一
- 一八 一・一八、結五・一
- 一九 一・一八、結五・一
- 二〇 一・一八、結五・一
- 二一 一・一八、結五・一
- 二二 一・一八、結五・一
- 二三 一・一八、結五・一
- 二四 一・一八、結五・一
- 二五 一・一八、結五・一
- 二六 一・一八、結五・一
- 二七 一・一八、結五・一
- 二八 一・一八、結五・一
- 二九 一・一八、結五・一
- 三〇 一・一八、結五・一
- 三一 一・一八、結五・一
- 三二 一・一八、結五・一
- 三三 一・一八、結五・一
- 三四 一・一八、結五・一
- 三五 一・一八、結五・一
- 三六 一・一八、結五・一
- 三七 一・一八、結五・一
- 三八 一・一八、結五・一
- 三九 一・一八、結五・一
- 四〇 一・一八、結五・一
- 四一 一・一八、結五・一
- 四二 一・一八、結五・一
- 四三 一・一八、結五・一
- 四四 一・一八、結五・一
- 四五 一・一八、結五・一
- 四六 一・一八、結五・一
- 四七 一・一八、結五・一
- 四八 一・一八、結五・一
- 四九 一・一八、結五・一
- 五〇 一・一八、結五・一
- 五一 一・一八、結五・一
- 五二 一・一八、結五・一
- 五三 一・一八、結五・一
- 五四 一・一八、結五・一
- 五五 一・一八、結五・一
- 五六 一・一八、結五・一
- 五七 一・一八、結五・一
- 五八 一・一八、結五・一
- 五九 一・一八、結五・一
- 六〇 一・一八、結五・一
- 六一 一・一八、結五・一
- 六二 一・一八、結五・一
- 六三 一・一八、結五・一
- 六四 一・一八、結五・一
- 六五 一・一八、結五・一
- 六六 一・一八、結五・一
- 六七 一・一八、結五・一
- 六八 一・一八、結五・一
- 六九 一・一八、結五・一
- 七〇 一・一八、結五・一
- 七一 一・一八、結五・一
- 七二 一・一八、結五・一
- 七三 一・一八、結五・一
- 七四 一・一八、結五・一
- 七五 一・一八、結五・一
- 七六 一・一八、結五・一
- 七七 一・一八、結五・一
- 七八 一・一八、結五・一
- 七九 一・一八、結五・一
- 八〇 一・一八、結五・一
- 八一 一・一八、結五・一
- 八二 一・一八、結五・一
- 八三 一・一八、結五・一
- 八四 一・一八、結五・一
- 八五 一・一八、結五・一
- 八六 一・一八、結五・一
- 八七 一・一八、結五・一
- 八八 一・一八、結五・一
- 八九 一・一八、結五・一
- 九〇 一・一八、結五・一
- 九一 一・一八、結五・一
- 九二 一・一八、結五・一
- 九三 一・一八、結五・一
- 九四 一・一八、結五・一
- 九五 一・一八、結五・一
- 九六 一・一八、結五・一
- 九七 一・一八、結五・一
- 九八 一・一八、結五・一
- 九九 一・一八、結五・一
- 一〇〇 一・一八、結五・一

フ 歌二〇・八 耶四九 ア 歌一六・二二 (賽四一・二)
 ・三九 亞六・五太
 二四・三一
 コ (歌七・三、八・七、九・四)
 エ 太一六・一六を見よ
 テ 歌九・四 (歌七・三)

サ (歌九・一四)
 キ 歌二四・一、二二
 四 結九・四、六 (歌一三・一六、一四、九、二〇・四)
 ユ 歌七・四一八 約三・三三を見よ

メ 歌六・六を見よ
 ミ 歌九・一六
 シ 歌一四・一、三
 工 歌五・九を見よ
 ヒ 歌六・一一を見よ
 (歌七・一四)
 モ (利二三・四〇)

セ 歌七・一五
 ス (歌二三・三)
 イ 歌二二・一〇、一九
 ・一 詩三・八
 ロ 歌四・四を見よ
 ハ 歌四・六を見よ
 ニ 歌四・一〇を見よ

ホ 歌五・一四を見よ
 ヘ 歌五・一三
 ト 歌三・四を見よ
 ・九
 チ 太二四・二二を見よ
 リ 來九・一四 約一七・七 歌一二・二一

又 歌二二・一四 (亞三・三・一五)
 ヨ 歌二一・三 利二六・二一 (結三七・二七、約一・二四)
 タ 賽四九・一〇 約四・二四

三 方より登るを見たり、かれ地と海とを害ふ權を與へられたる四人の御使にむかひ、大聲に呼はりて言ふ三「われらが我らの神の僕の額に印するまでは、地をも海をも樹をも害ふな」四 われ印せられたる者の數を聽きしに、イスラエルの子等のもろもろの族の中にて、印せられたるもの合せて十四萬四千あり。五 ユダの族の中にて一萬二千印せられ、ルベンの族の中にて一萬二千、ガドの族の中にて一萬二千、六 アセルの族の中にて一萬二千、ナフタリの族の中にて一萬二千、マナセの族の中にて一萬二千、七 シメオンの族の中にて一萬二千、レビの族の中にて一萬二千、八 イサカルの族の中にて一萬二千、ハゼブルンの族の中にて一萬二千、ヨセフの族の中にて一萬二千、九 ベニヤミンの族の中にて一萬二千印せられたり。九 この後われ見しに、視よ、もろもろの國・族・民・國語の中より、誰も數へつくすこと能はぬ大なる群衆、しるき衣を纏ひて手に棕櫚の葉をもち、御座と羔羊との前に立ち、一〇 大聲に呼はりて言ふ「救は御座に坐したまふ我らの神と羔羊とにこそ在れ」二 御使みな御座および長老たちと四つの活物との周圍に立ちて、御座の前に平伏し神を拜して言ふ、二三「アアメン、讚美・榮光・智慧・感謝・尊貴・能力・勢威、世々限りなく我らの神にあれ、アアメン」三 長老たちの一人われに向ひて言ふ「この白き衣を著たるは如何なる者にして何處より來りしか」四 我いふ「わが主よ、なんぢ知れり」かれ言ふ「かれらは大なる患難より出できたり、羔羊の血に己が衣を洗ひて白くしたる者なり。一五 この故に神の御座の前にありて晝も夜もその聖所にて神に事ふ。御座に坐したまふ者は彼らの上に幕屋を張り給ふべし。一六 彼らは重ねて飢ゑず、重ねて渴か

七 ず、日も熱も彼らを侵すことなし。一七 御座の前にいます羔羊は、彼らを牧して生命の水の泉にみちびき、神は彼らの目より凡ての涙を拭ひ給ふべければなり』

第八章

一 第七の封印を解き給ひたれば、凡そ半時のあひだ天静かなりき。二 われ神の前に立てる七人の御使を見たり、彼らは七つのラッパを與へられたり。

三 また他の一人の御使、金の香爐を持ちきたりて祭壇の前に立ち、多くの香を與へられたり。これは凡ての聖徒の祈に加へて御座の前なる金の香壇の上に獻げんためなり。四 而して香の煙、御使の手より聖徒たちの祈とともに神の前に上れり。五 御使その香爐をとり之に祭壇の火を盛りて地に投げたれば、數多の雷霆と聲と電光と、また地震おこれり。

六 ここに七つのラッパをもてる七人の御使これを吹く備をなせり。

七 第一の御使ラッパを吹きしに、血の混りたる雹と火とありて、地にふりくだり、地の三分の一焼け失せ、樹の三分の一焼け失せ、もろもろの青草焼け失せたり。

八 第二の御使ラッパを吹きしに、火にて燃ゆる大なる山の如きもの海に投げ入れられ、海の三分の一血に變

じ、九 海の中の造られたる生命あるものの三分の一死に、船の三分の一滅びたり。

一〇 第三の御使ラッパを吹きしに、燈火のごとく燃ゆる大なる星天より隕ちきたり、川の三分の一と水の源泉

イ詩一二一・五六 八(太五・四) 九・一三
口詩二三・一、二、太二 六 黙九・一三、來九・四 九・一三
六 及び約一〇 五、七、九、一二 又 黙六・九を見よ ヨ利一六・一二
一、一七(約四・一) 八 黙八・六一、一三、九 (歴九・二) タ(結一〇・二)
ハ 黙二一・六、二二 一、一三、一一、一 黙五・八、九 黙四・五を見よ
一、一七(約四・一) 五(黙一・四) 太一 黙五・八、九 黙六・一二を見よ
四 八・一〇を見よ 出三〇・一、三、民四 黙八・二を見よ
二 黙二一・四、三二 太二四・三一を見よ 一、一 黙八・五、 黙八・二を見よ

ナ 結三八・二二(賽二) ノ 黙一六・三(黙一) 八・二 耳二・三〇 六 出七・二七
ラ 黙八・七一、一二、九 二二
一、一五、一八、一二、一 一(賽二・一六) 一
四 亞一三・八、九 黙九・一(黙六・一) 三 賽一四・一二
ム(黙九・四) 三 賽一四・一二
ウ 黙九・四 黙一四・七、一六、四
ヤ 耶九・一五、二三、一五
見よ(出二〇・一二) 一三
一三

一三

フ 黙一・二・四
 ア 黙九・二・二、一・一
 コ 黙一六・一〇
 一四、二二、二二
 八・三一を見よ
 三 黙九・七、二一
 田 黙八・七
 二 黙一四・六、一九
 サ 黙八・二
 メ 黙一・一八を見よ
 一〇・二二、一五
 七 黙六・六を見よ
 一七
 キ 黙八・二〇を見よ
 ミ 黙一九・二八、四一
 ヒ 黙九・五、一〇
 代 黙七・二、三
 二六
 テ 黙三・一〇を見よ
 ヌ 黙九・二、二一、一
 九・二八
 下 一〇・二一、二四
 イ 黙九・一〇
 二 黙九・三
 三 黙九・三を見よ
 六 耳二・四
 八 伯三・二一、七・一
 へ 耳一・六
 五 耶八・三 黙六
 ト 耳二・五
 耶 四七
 ル 黙九・五
 三
 千 耳二・四
 一 黙九・三を見よ
 又 黙九・一九
 黙九・五

二 との上におちたり。二この星の名は苦艾といふ。水の三分の一は苦艾となり、水の苦くなりしに因りて多くの人死にたり。

三 第四の御使ラツパを吹きしに、日の三分の一と月の三分の一と星の三分の一と撃たれて、その三分の一は暗くなり、晝も三分の一は光なく、夜も亦おなじ。

三 また見しに、一つの鷲の中空を飛び、大なる聲して言ふを聞けり。曰く『地に住める者どもは禍害なるかな、禍害なるかな、禍害なるかな、尙ほかに三人の御使の吹かんとするラツパの聲あるに因りてなり』

第九章

一 第五の御使ラツパを吹きしに、われ一つの星の天より地に隕ちたるを見たり。この星は底なき坑の鍵を與へられたり。二斯て底なき坑を開きたれば、大なる爐の煙のごとき煙、坑より立ちのぼり、

四三 日も空も坑の煙にて暗くなれり。三煙の中より蝗地上に出でて、地の蝸のもてる力のごとき力を與へられ、四地の草、すべての青きもの又すべての樹を害ふことなく、ただ額に神の印なき人をのみ害ふことを命ぜられたり。

五 然れど彼らを殺すことを許されず、五月のあひだ苦しむることを許さる、その苦痛は蝸に刺されたる苦痛のごとし。六このとき人々、死を求むとも見出さず、死なんと欲すとも死は逃げ去るべし。七かの蝗の形は戦争の爲

八 に具へたる馬のごとく、頭には金に似たる冠冕の如きものあり、顔は人の顔のごとく、八之に女の頭髮のごとき頭髮あり、齒は獅子の齒のごとし。九また鐵の胸當のごとき胸當あり、その翼の音は軍車の轟くごとく、多くの

一〇 馬の戦鬪に馳せゆくが如し。一〇また蝸のごとき尾ありて之に刺あり、この尾に五月のあひだ人を害ふ力あり。

ア 歌一三・一六、一九
 五、一八、二〇、二一
 二 詩一一五・二三
 サ 歌二〇・二二(但七
 ・一〇)
 キ 歌一五・五 (歌四・
 一)
 エ 來九・四を見よ
 一 歌四・五を見よ
 二 歌六・二二を見よ
 シ 歌一六・二二(歌八
 ・七)
 三 歌一一・一九
 四 歌一二・三、二四
 五 歌一三・一、一五、
 一六、一七、一八、
 一九、二〇、二一、
 二二、二三、二四、
 二五、二六、二七、
 二八、二九、三〇、
 三一、三二、三三、
 三四、三五、三六、
 三七、三八、三九、
 四〇、四一、四二、
 四三、四四、四五、
 四六、四七、四八、
 四九、五〇、五一、
 五二、五三、五四、
 五五、五六、五七、
 五八、五九、六〇、
 六一、六二、六三、
 六四、六五、六六、
 六七、六八、六九、
 七〇、七一、七二、
 七三、七四、七五、
 七六、七七、七八、
 七九、八〇、八一、
 八二、八三、八四、
 八五、八六、八七、
 八八、八九、九〇、
 九一、九二、九三、
 九四、九五、九六、
 九七、九八、九九、
 一〇〇
 九、一三、一六、一
 七、一三、二四、一
 一、一六、二三、二
 〇、二(賽二七・一)
 八 歌一三・一、一七、
 三、七、九
 二 歌一三・一、一七、
 三、七、九
 三、二二、一六、但七
 又 歌二・二七を見よ
 九、二〇、二四
 七、二〇、一九
 一、二
 へ 歌八・二二(八・七)
 ト 但八・一〇
 子 歌一三・三を見よ
 リ (太二・一六)
 又 歌二・二七を見よ
 ル 歌二・二六を見よ
 ナ 哥後二・二二を見よ
 ワ 歌二・二四、一七
 ・三
 カ 歌一・一三(歌一三
 ・五)
 ヨ 猶九を見よ
 タ 歌一三・三を見よ
 レ 太二五・四一
 ソ 歌一三・三を見よ
 ツ 歌二・二二、二二、
 太二
 ム (路一〇・一八約一
 二・三一)
 ウ 歌一・一五を見よ
 ナ 歌一三・一四、一九
 井 歌七・一〇を見よ
 ・二〇、二〇、三、八、
 ノ (歌一・一五)

一八 諸國の民、怒を懐けり、なんぢの怒も亦いたれり、死にたる者を審き、なんぢの僕なる預言者および聖徒、

一九 また小なるも大なるも汝の名を畏るる者に報賞をあたへ、地を亡す者を亡したまふ時いたれり』一九 斯て天にある

神の聖所ひらけ、聖所のうちに契約の櫃見え、數多の電光と聲と雷霆と、また地震と大なる雹とありき。

一 また天に大なる徴見えたり。日を著たる女ありて其の足の下に月あり、其の頭に十二の星の

冠冕あり。二 かれは孕りをりしが、子を産まんとして産の苦痛と惱とのために叫べり。三 また天に

他の徴見えたり。視よ、大なる赤き龍あり、これに七つの頭と十の角とありて頭には七つの冠冕あり。四 その尾

は天の星の三分の一を引きて之を地に落せり。龍は子を産まんとする女の前に立ち、産むを待ちて其の子を食ひ

盡さんと構へたり。五 女は男子を産めり、この子は鐵の杖もて諸種の國人を治めん。かれは神の許に、その御座

の下に擧げられたり。六 女は荒野に逃げゆけり、彼處に千二百六十日の間かれが養はるる爲に神の備へ給へる

所あり。

七 斯て天に戦争おこれり、ミカエル及びその使たち龍とたたかふ。龍もその使たちも之と戦ひしが、八 勝つ

こと能はず、天には、はや其の居る所なかりき。九 かの大なる龍、すなはち悪魔と呼ばれ、サタンと呼ばれたる

全世界をまどはす古き蛇は落され、地に落され、その使たちも共に落されたり。一〇 我また天に大なる聲ありて

『われらの神の救と能力と國と神のキリストの權威とは、今すでに來れり。我らの兄弟を訴へ、夜晝われらの神の

二 前に訴ふるもの落されたり。二而して兄弟たちは羔羊の血と己が證の言とによりて勝ち、死に至るまで己が生命を惜まざりき。三この故に天および天に住める者よ、よろこべ、地と海とは禍害なるかな、悪魔おのが時の暫時なるを知り、大なる憤恚を懷きて汝等のもとに下りたればなり』と云ふを聞けり。

一三 斯て龍はおのが地に落されしを見て男子を生みし女を責めたりしが、一四 女は荒野なる己が處に飛ぶために大なる鷲の兩の翼を與へられたれば、其處にいたり、一年、二年、また半年のあひだ蛇のまへを離れて養はれたり。一五 蛇はその口より水を川のごとく、女の背後に吐きて之を流さんとしたれど、一六 地は女を助け、その口を開きて龍の口より吐きたる川を呑み盡せり。一七 龍は女を怒りてその裔の残れるもの、即ち神の誠命を守り、イエスの證を有てる者に戦鬪を挑まんとして出でゆき、一八 海邊の砂の上に立てり。

第二十三章

一 我また一つの獸の海より上るを見たり。之に十の角と七つの頭とあり、その角に十の冠冕あり、頭の上には神を瀆す名あり。二 わが見し獸は豹に似て、その足は熊のごとく、その口は獅子の口のごとし。龍は、これに己が能力と己が座位と大なる權威とを與へたり。三 我その頭の一つ傷つけられて死ぬばかりなるを見しが、その死ぬべき傷いやされたれば、全地の者これを怪しみて獸に従へり。四 また龍おのが權威を獸に與へしによりて彼ら龍を拜し、且その獸を拜して言ふ『たれか此の獸に等しき者あらん、誰か之と戦ふことを得ん』五 獸また大言と瀆言とを語る口を與へられ、四十二个月のあひだ働く權威を與へらる、六 彼は口をひ

イ伯一・一一、二・五 水路一四・二六
 (路三三・三一 彼前 (黙二・一〇))
 又黙一〇・六を見よ
 ル黙二二・三を見よ
 夕黙二二・九を見よ
 一八九・二〇 (黙二二・八)
 五・八) へ黙一三・六
 又黙二二・三を見よ
 井黙二二・三を見よ
 ケ但七・四
 マ但七・五
 ア黙二二・三を見よ
 サ黙一三・一二
 口黙七・一四を見よ
 ト黙一八・二〇 詩九
 ヲ黙二二・三を見よ
 フ黙二二・三を見よ
 キ但七・八、一一、二
 八黙二二・一七を見よ
 六・二一 賽四四
 カ出二九・四 申三三
 ツ創三・一五
 一五・二、一六・一三
 一〇、二五、一一・三六
 二黙一五・二 約一六
 二三
 二一 賽四〇・三一
 ネ黙一四・一二 約登
 (黙二二・七、一七、
 ク黙一七・三 (但七・
 エ黙一三・一二 (黙一
 ユ黙一一・二を見よ
 二三を見よ 約登
 七 七 (黙二二・二)
 ナ黙一・二、六・九、
 ウ (黙二二・七、一七、
 ヤ但七・六 何二三・七
 テ黙一七・八

一九・三 賽三四・八 エ 黙一三・一〇を見よ
 一〇
 一四・九を見よ
 二 黙一三・一六を見よ
 三 黙四・八
 四 黙一三・一七を見よ ヒ 黙一三・一八
 五 黙一三・一八 撒 八(太一七・五)
 六 黙一三・一九
 七 黙一三・二〇
 八 黙一三・二一
 九 黙一三・二二
 一〇 黙一三・二三
 一一 黙一三・二四
 一二 黙一三・二五
 一三 黙一三・二六
 一四 黙一三・二七
 一五 黙一三・二八
 一六 黙一三・二九
 一七 黙一三・三〇
 一八 黙一三・三一
 一九 黙一三・三二
 二〇 黙一三・三三
 二一 黙一三・三四
 二二 黙一三・三五
 二三 黙一三・三六
 二四 黙一三・三七
 二五 黙一三・三八
 二六 黙一三・三九
 二七 黙一三・四〇
 二八 黙一三・四一
 二九 黙一三・四二
 三〇 黙一三・四三
 三一 黙一三・四四
 三二 黙一三・四五
 三三 黙一三・四六
 三四 黙一三・四七
 三五 黙一三・四八
 三六 黙一三・四九
 三七 黙一三・五〇
 三八 黙一三・五一
 三九 黙一三・五二
 四〇 黙一三・五三
 四一 黙一三・五四
 四二 黙一三・五五
 四三 黙一三・五六
 四四 黙一三・五七
 四五 黙一三・五八
 四六 黙一三・五九
 四七 黙一三・六〇
 四八 黙一三・六一
 四九 黙一三・六二
 五〇 黙一三・六三
 五一 黙一三・六四
 五二 黙一三・六五
 五三 黙一三・六六
 五四 黙一三・六七
 五五 黙一三・六八
 五六 黙一三・六九
 五七 黙一三・七〇
 五八 黙一三・七一
 五九 黙一三・七二
 六〇 黙一三・七三
 六一 黙一三・七四
 六二 黙一三・七五
 六三 黙一三・七六
 六四 黙一三・七七
 六五 黙一三・七八
 六六 黙一三・七九
 六七 黙一三・八〇
 六八 黙一三・八一
 六九 黙一三・八二
 七〇 黙一三・八三
 七一 黙一三・八四
 七二 黙一三・八五
 七三 黙一三・八六
 七四 黙一三・八七
 七五 黙一三・八八
 七六 黙一三・八九
 七七 黙一三・九〇
 七八 黙一三・九一
 七九 黙一三・九二
 八〇 黙一三・九三
 八一 黙一三・九四
 八二 黙一三・九五
 八三 黙一三・九六
 八四 黙一三・九七
 八五 黙一三・九八
 八六 黙一三・九九
 八七 黙一三・一〇〇
 八八 黙一三・一〇一
 八九 黙一三・一〇二
 九〇 黙一三・一〇三
 九一 黙一三・一〇四
 九二 黙一三・一〇五
 九三 黙一三・一〇六
 九四 黙一三・一〇七
 九五 黙一三・一〇八
 九六 黙一三・一〇九
 九七 黙一三・一一〇
 九八 黙一三・一一一
 九九 黙一三・一一二
 一〇〇 黙一三・一一三

は茲にあり』

一三 我また天より聲ありて『書き記せ』今よりのち主にありて死ぬる死人は幸福なり』御靈も言ひたまふ『然り、彼等はその勞役を止めて息まん。その業これに隨ふなり』と言ふを聞けり。

一四 また見しに、視よ、白き雲あり、その雲の上に人の子の如きもの坐して、首には金の冠冕をいただき、手には利き鎌を持ちたまふ。一五 又ほかの御使、聖所より出で雲のうへに坐したまふ者にむかひ、大聲に呼はりて

一六 『なんぢの鎌を入れて刈れ、地の穀物は全く熟し、既に刈り取るべき時至ればなり』と言ふ。一六 かくて雲の上に坐したまふ者、その鎌を地に入れたれば、地の穀物は刈り取られたり。

一七 又ほかの御使、天の聖所より出で同じく利き鎌を持てり。一八 又ほかの火を掌どる御使、祭壇より出で、利き鎌をもつ者にむかひ大聲に呼はりて『なんぢの利き鎌を入れて地の葡萄の樹の房を刈り收めよ、葡萄は既に熟したり』と言ふ。一九 御使その鎌を地に入れて地の葡萄を刈りをさめ、神の憤恚の大なる酒槽に投入れたり。二〇 かくて都の外にて酒槽を踐みしに、血酒槽より流れ出でて馬の轡に達くほどになり、一千六百町に廣がれり。

第一五章

一 我また天に他の大なる怪しむべき徴を見たり。即ち七人の御使ありて最後の七つの苦難を持てり、神の憤恚は之にて全うせらるるなり。

二 我また火の混りたる玻璃の海を見しに、獸とその像とその名の數字とに勝ちたる者ども、神の立琴を持ち

三 て玻璃の海の邊に立てり。三 彼ら神の僕モーセの歌と羔羊の歌とを歌ひて言ふ『主なる全能の神よ、なんぢの御業は大なるかな、妙なるかな、萬國の王よ、なんぢの道は義なるかな、眞なるかな。四 主よ、たれか汝を畏れざる、誰か御名を尊ばざる、汝のみ聖なり、諸種の國人きたりて御前に拜せん。なんぢの審判は既に現れたればなり』

六五 五 この後われ見しに、天にある證の幕屋の聖所ひらけて、六 かの七つの苦難を持てる七人の御使、きよき輝ける亞麻布を着、金の帯を胸に束ねて聖所より出づ。七 四つの活物の一つ、その七人の御使に世々限りなく生きたまふ神の憤恚の満ちたる七つの金の鉢を與へしかば、八 聖所は神の榮光とその權力とより出づる煙にて満ち、七人の御使の七つの苦難の終るまでは誰も聖所に入ること能はざりき。

第一六章

一 我また聖所より大なる聲ありて七人の御使に『往きて神の憤恚の鉢を地の上に傾けよ』と言ふを聞けり。

二 斯て第一の者ゆきて其の鉢を地の上に傾けたれば、獸の徽章を有てる人々とその像を拜する人々との身に悪しき苦しき腫物生じたり。

三 第二の者その鉢を海の上に傾けたれば、海は死人の血の如くなりて海にある生物ことごとく死にたり。四 第三の者その鉢をもろもろの河と、もろもろの水の源泉との上に傾けたれば、みな血となれり。五 われ水

- イ 雷二・五等 來三
- 五を見よ
- 一四 何一四・九
- 二・二三
- ヘ 耶一〇・七 (提前一
- ル 出三・八・二一 民一
- 五〇 (黙一三・六
- 一・二二
- ト 黙一六・七
- 來八・五)
- チ 黙一四・七 耶一〇
- テ 黙一・一九を見よ
- タ 黙一四・一五を見よ
- ナ 黙二一・一〇を見よ
- ニ 黙一五・七
- ハ 黙五・九、一〇、一
- ト 黙一六・七
- レ 黙四・六を見よ
- ラ 出二九・一八 賽六
- ノ 黙一六・二以下 詩
- 七九・六 耶一〇・
- 二五 結二三・三一
- 二 黙一・八を見よ
- チ 黙一四・七 耶一〇
- テ 黙一・一九を見よ
- タ 黙一四・一五を見よ
- ナ 黙二一・一〇を見よ
- ニ 黙一五・七
- ホ 申三三・三、四 詩一
- リ 黙一六・五
- カ 黙一五・一を見よ
- キ 黙一六・一、一七、
- ク 黙一三・一六、一七、
- 一・二二、一三九
- 又 詩八六・九 (賽六六
- ヨ 黙一・二三
- ハ 八)
- ウ 黙一五・二を見よ
- エ 一四・九
- フ 黙八・一〇を見よ
- ヤ 黙一三・一二を見よ
- コ 出七・二七—二〇
- マ 黙一六・二—(出九
- メ 九—二一 申二八
- 三・三五)
- ケ (黙八・八、九 出七
- コ 一七—二一 黙一
- 一・一六)

ケ 黙一八・一五
 フ 黙一八・九
 コ 結二七・三〇
 エ 結二七・三二
 (黙一三・四)
 テ 黙一八・一〇を見よ
 ア 書七・六 伯二・一二
 冥二・一〇 但三七
 シ (路一・四九、五
 セ 結五二・六三、六
 二〇
 サ 但二七・三〇
 キ 黙一八・一六
 ヌ 黙一八・三、一五
 ヲ 黙一八・一〇を見よ
 ミ 黙一八・一七を見よ
 モ 黙五・二を見よ
 ハ 傳一・二、四 耶二五
 二 耶七・三四、一六
 九
 ホ 賽二・三八 (黙一八
 三、六・一五)
 ヘ 黙九・二二を見よ
 翁三・四
 ト 黙一六・六を見よ
 チ (太二三・三五)
 リ 黙一九・六、一一
 一五を見よ
 ヌ 黙一九・三、四、六
 ル 黙七・一〇を見よ
 ナ (黙四・一一)
 ワ (黙六・一〇)
 カ 黙一六・七を見よ
 ヨ 黙一七・一を見よ
 タ 黙六・一〇、一八
 二〇、一六・六 申
 三三・四三 王下九
 レ 黙一九・一、四
 ソ 黙一八・九を見よ
 ツ 黙四・四を見よ
 ネ 黙四・六を見よ

舟子および海によりて生活を爲すもの遙に立ち、ハバビロンの焼かるる煙を見て叫び「いづれの都か、この大なる都に比ぶべき」と言はん。一九 彼等また塵をおのが首に被りて泣き悲しみ叫びて「禍害なるかな、禍害なるかな、此の大なる都、その奢によりて海に船を有てる人々の富を得たる都、かく時の間に荒涼ばんとは」と言はん。二〇 天よ、聖徒・使徒・預言者よ、この都につきて喜べ、神なんぢらの爲に之を審き給ひたればなり」

二 爰に一人の強き御使、大なる礮臼のごとき石を擡げ海に投げて言ふ「おほいなる都バビロンは斯のごとく烈しく撃ち倒されて、今より後、見えざるべし。三 今よりのち立琴を弾くもの、樂を奏するもの、笛を吹く者、ラツパを鳴す者の聲なんぢの中に聞えず、今より後さまさまの細工をなす細工人なんぢの中に見えず、礮臼の音なんぢの中に聞えず、三 今よりのち燈火の光なんぢの中に輝かず、今よりのち新郎・新婦の聲なんぢの中に聞えざるべし。そは汝の商人は地の大臣となり、諸種の國人は、なんぢの呪術に惑され、二 四 また預言者・聖徒および凡て地の上に殺されし者の血は、この都の中に見出されたればなり」

一 この後われ天に大なる群衆の大聲のごとき者ありて、斯く言ふを聞けり。曰く「ハレルヤ、救と栄光と権力とは、我らの神のものなり。ニ その御審は眞にして義なるなり、己が淫行をもて地を汚したる大淫婦を審き、神の僕らの血の復讐を彼になし給ひしなり」

三 また再び言ふ「ハレルヤ、彼の焼かるる煙は世々限りなく立ち昇るなり」 四 爰に二十四人の長老と四つの

ヨハネ黙示録 一八・一八——一九・四

五二九

第一九章

一 この後われ天に大なる群衆の大聲のごとき者ありて、斯く言ふを聞けり。曰く「ハレルヤ、救と栄光と権力とは、我らの神のものなり。ニ その御審は眞にして義なるなり、己が淫行をもて地を汚したる大淫婦を審き、神の僕らの血の復讐を彼になし給ひしなり」

三 また再び言ふ「ハレルヤ、彼の焼かるる煙は世々限りなく立ち昇るなり」 四 爰に二十四人の長老と四つの

ヨハネ黙示録 一八・一八——一九・四

五二九

第一九章

一 この後われ天に大なる群衆の大聲のごとき者ありて、斯く言ふを聞けり。曰く「ハレルヤ、救と栄光と権力とは、我らの神のものなり。ニ その御審は眞にして義なるなり、己が淫行をもて地を汚したる大淫婦を審き、神の僕らの血の復讐を彼になし給ひしなり」

三 また再び言ふ「ハレルヤ、彼の焼かるる煙は世々限りなく立ち昇るなり」 四 爰に二十四人の長老と四つの

ヨハネ黙示録 一八・一八——一九・四

五 活物と平伏して御座に坐したまふ神を拜し「アアメン、ハレルヤ」と言へり。五また御座より聲出でて言ふ「すべて神の僕たるもの、神を畏るる者よ、小なるも大なるも、我らの神を讃め奉れ」六 われ大なる群衆の聲おほくの水の音のごとく、烈しき雷霆の聲の如きものを聞けり。曰く「ハレルヤ、全能の主、われらの神は統治すなり、七 われら喜び樂しみて之に榮光を歸し奉らん。そは羔羊の婚姻の期いたり、既にその新婦みづから準備したればなり。八 彼は輝ける潔き細布を著ることを許されたり、此の細布は聖徒たちの正しき行爲なり」九 御使また我に言ふ「なんぢ書き記せ、羔羊の婚姻の宴席に招かれたる者は幸福なり」と。また我に言ふ「これ神の眞の言なり」一〇 我その足下に平伏して拜せんとしたれば、彼われに言ふ「慎みて然すな、我は汝およびイエスの證を保つ汝の兄弟とともに僕たるなり。なんぢ神を拜せよ、イエスの證は即ち預言の靈なり」二 我また天の開けたるを見しに、視よ、白き馬あり、之に乗りたまふ者は「忠實また眞」と稱へられ、義をもて審き、かつ戦ひたまふ。三 彼の目は饑のごとく、その頭には多くの冠冕あり、また記せる名あり、之を知る者は彼の他になし。三 彼は血に染みたる衣を纏へり、その名は「神の言」と稱ふ。一四 天に在る軍勢は白く潔き細布を著、馬に乗りて彼にしたがふ。一五 彼の口より利き劍いづ、之をもて諸國の民をうち、鐵の杖をもて之を治め給はん。また自ら全能の神の烈しき怒の酒槽を踐みたまふ。一六 その衣と股とに「王の王、主の主」と記せる名あり。一七 我また一人の御使の太陽のなかに立てるを見たり。大聲に呼はりて、中空を飛ぶ凡ての鳥に言ふ「いざ

イ 黙四・一〇を見よ
 口 黙五・一四を見よ
 詩 一〇六・四八
 ハ 黙一九・三・六
 ニ 黙二一・一八を見よ
 ホ 詩 一三四・一、一三
 五・一
 ハ 黙一九・一を見よ
 ト 黙一・一五を見よ
 チ 黙六・二を見よ
 リ 黙一九・四
 ヌ 黙一・一八
 ル 黙一・一六を見よ
 ヲ 黙一九・九、六二二
 二、二五・一〇路
 一三・三六約三・二
 一三・一九
 九 弗五・二三、三二
 ワ 黙二・二、九
 (太一・二〇)
 カ 黙一九・一四(黙一
 五・六)
 ツ 黙二・五、三三、
 六、一七・一七
 レ 黙一九・七を見よ
 ソ 路一四・一五、二
 (二・一六)
 ラ 黙二・一七を見よ
 ム 黙一・一其他
 ウ 黙四・一約一・五
 一を
 ク 黙一・一四を見よ
 ヤ 黙六・二、一三・三
 マ 黙一九・一六、二
 一七
 (黙三・四)
 テ 黙一九・二一、一
 一六を見よ
 ア 黙二・一四 撒後二
 (八)
 サ 黙二・二七を見よ
 シ 黙一四・一九、二〇
 キ 黙一七・一四を見よ
 コ 約一・二を見よ
 ク 約一九・八を見よ
 ケ 黙一・一四
 コ 約一・二を見よ
 ク 約一九・八を見よ

て第二の死は權威を有たず、彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年のあひだ王たるべし。

七 千年終りて後サタンは其の檻より解き放たれ、ハ出でて地の四方の國の民、ゴグとマゴグとを惑し戰鬥の

ために之を集めん、その數は海の砂のごとし。九 斯て彼らは地の全面に上りて聖徒たちの陣營と愛せられたる都

とを圍みしが、天より火くだりて彼等を焼き盡し、一〇 彼らを惑したる惡魔は、火と硫黄との池に投げ入れられた

り。ここは獸も偽預言者もまた居る所にして、彼らは世々限りなく晝も夜も苦しめらるべし。

二 我また大なる白き御座および之に坐し給ふものを見たり。天も地もその御顔の前を遁れて跡だに見えず

なりき。三 我また死にたる者の大なるも小なるも御座の前に立てるを見たり。而して數々の書展かれ、他にまた

一つの書ありて展かる、即ち生命の書なり、死人は此等の書に記されたる所の、その行爲に隨ひて審かれたり。

三 海はその中にある死人を出し、死も陰府もその中にある死人を出したれば、各自その行爲に隨ひて審かれた

り。四 斯て死も陰府も火の池に投げ入れられたり、此の火の池は第二の死なり。五 すべて生命の書に記されぬ者

は、みな火の池に投げ入れられたり。

第二一章

一 我また新しき天と新しき地とを見たり。これ前の天と前の地とは過ぎ去り、海も亦なきなり。

二 我また聖なる都、新しきエルサレムの、夫のために飾りたる新婦のごとく準備して、神の許をい

で、天より降るを見たり。三 また大なる聲の御座より出づるを聞けり。曰く「視よ、神の幕屋、人と偕にあり、

- イ 黙二〇・一四、二
- 一 一を見よ
- ト 黙二〇・三、一〇
- チ 黙一六・一四を見よ
- リ 來一・一二
- ハ 黙二〇・四を見よ
- ニ 黙二〇・二
- ホ 黙七・一を見よ
- ヘ 結三八・二、一八、
- 三九・一、六
- ト 結三八・二二、三九
- 六 六 黙一三・一三
- カ 黙二〇・三八
- ヨ 黙二〇・一四、一五、
- ハ 一 九・二〇を見よ
- ル 申二三・一四
- タ 黙一六・一三を見よ
- ナ 黙一・一八を見よ
- ハ 井 黙一・一八
- レ 黙一四・一〇、一一
- ソ 黙四・二を見よ
- ツ 黙六・一四を見よ
- （黙二一・一）
- ネ 但二・三五 黙二二
- ハ 一 九・二〇を見よ
- ナ 黙一・一八を見よ
- 井 黙一・一八
- ノ 賽二六・一九
- オ 黙六・八を見よ（黙
- 二一・四 哥前一五
- ニ 二六）
- ク 黙二〇・一二を見よ
- ヤ 黙二〇・一三を見よ
- マ 黙二〇・一〇を見よ
- 二〇・一五
- ケ 黙二〇・六を見よ
- フ 黙二〇・一二を見よ
- コ 賽六五・一七、六六
- （黙二一・一〇）
- サ 黙二一・九、二三、
- エ 黙二〇・一一 後後
- 三・一〇
- テ 黙二一・一〇、一一
- 二 二を見よ
- ア 黙三・一二を見よ
- （黙二一・一〇）
- サ 黙二一・九、二三、
- 一 七、一九、七を見
- よ（賽六一・一〇）

一六 われイエスは我が使を遣して諸教會のために此等のことを汝らに證せり。我はダビデの萌蘗また其の裔なり、輝ける曙の明星なり

一七 御靈も新婦もいふ「來りたまへ」聞く者も言へ「きたり給へ」と、渴く者はきたれ、望む者は價なくして生命の水を受けよ。

一八 われ凡てこの書の預言の言を聞く者に證す。もし之に加ふる者あらば、神はこの書に記されたる苦難を彼に加へ給はん。一九 若しこの預言の言を省く者あらば、神はこの書に記されたる生命の樹、また聖なる都より彼の受くべき分を省き給はん。

二〇 これらの事を證する者いひ給ふ「然り、われ速かに到らん」アアメン、主イエスよ、來りたまへ。
二一 願くは主イエスの恩恵、なんぢら凡ての者と偕に在らんことを。

ヨハネの黙示録 をはり

イ 黙一・一	ニ 黙五・五を見よ	チ 黙二一・九、二二・二を見よ	ル 黙二二・七を見よ	カ 黙二二・七を見よ	ツ 黙二二・七を見よ
ロ 黙二二・六、一・一	ホ (太一・一)	ニ 二を見よ	ヲ 申四・二、一・二・三	ヨ 黙二二・一八を見よ	ネ (哥前二六・二二)
ハ 黙二・四、二一、三	ヘ 黙二二・八を見よ	リ 黙二一・六を見よ	ニ (黙三〇・六)	タ 黙二二・二を見よ	ナ 羅一六・二〇を見よ
ニ 二	ト 黙二・七、一四、一三	又 黙二二・二、七、一	ワ 黙一五・六一、一六・二	ソ 黙二二・二	

一・六 異本「王」さあり。
五・一〇 異本「王」さあり。

一三・一〇 異本「人を塵にする者は己も塵にせられ」さあり。